

禁忌アーカイブ: LEAKED

Case.01: ドバイ・契約の陥落 —— 砂漠の鎖

■ 目次

- ・ アーカイブ 001: 黄金の応接室と漆黒の奴隷衣装
- ・ アーカイブ 002: 1cm のチタンによる「所有の刻印」
- ・ アーカイブ 003: 蹂躩の始まり —— 日常という名の終焉
- ・ アーカイブ 004: 地中海の牢獄 —— 狂宴のハイレグ
- ・ アーカイブ 005: 卑猥なる「オブジェ」の披露
- ・ アーカイブ 006: 逃げ場のない洋上、裂け目の変形
- ・ アーカイブ 007: ポールに縛り付けられる「人形」
- ・ アーカイブ 008: ダンスという名の「肉の断裂」
- ・ アーカイブ 009: 食い込みの絶頂 —— 視線に晒される「裂け目」
- ・ アーカイブ 010: 洋上の水槽 —— 漆黒の肉人形
- ・ アーカイブ 011: 水の牢獄とハイレグの限界
- ・ アーカイブ 012: 蛇の投入 —— 閉鎖空間の蹂躩
- ・ アーカイブ 013: 食い込みの絶頂 —— 肉を削る噛み合わせ
- ・ アーカイブ 014: 水圧が加速させる「裂け目」の拡張
- ・ アーカイブ 015: 蛇による「食い込み」の増幅
- ・ アーカイブ 016: 水底の絶頂 —— 蹂躩の定着
- ・ アーカイブ 017: 黄金のデッキ —— 剥き出しの食い込み

- ・ アーカイブ 018: M 字開脚の祭壇 —— 肉の断層
- ・ アーカイブ 019: ドバイヤギショー —— 極限の拘束と獣の吐息
- ・ アーカイブ 020: 獣の舌 —— 1cm チタンの浮揚
- ・ アーカイブ 021: 蹂躞の残響 —— 剥き出しの裂け目

■ アーカイブ 001: 黄金の応接室と漆黒の奴隷衣装

ドバイの超高層ビル。地上 800 メートルの静寂を支配するのは、完璧に調整された空調の微かな唸り音だけだ。強化ガラスの向こうには、砂漠の熱風に揺らめく黄金の街が、まるで富の墓標のように広がっている。その最上階、室温 22 度に保たれた応接室のソファに、彼女は座らされていた。

かつて競泳自由形で世界を沸かせ、無駄のない筋肉美から「水の妖精」と讃えられたトップアスリート。だが、度重なる怪我とスポンサーの離脱。彼女に残されたのは、鍛え上げられた美しい肉体と、自身の力では決して返せない額の負債だけだった。

「君の記録と、その肉体を、我々の『特別パーティ』のオブジェとして貸してほしい。報酬は、君の国で一生かかっても稼げない額だ」

砂漠の富豪は、冷酷な笑みを浮かべ、一枚の紙を差し出す。それは契約書などという生ぬるいものではなく、彼女の肉体への「所有権移譲書」だった。彼女は、提示された非現実的な数字に眩暈を起こしながらも、その報酬が「自分の人生を賭けるに値する」と錯覚してしまう。

しかし、彼女はその契約の代償が、これから身を包むことになる**「漆黒の超鏡面ラテックス・モノキニ」**であることを知らなかった。それは、彼女の誇り高い肉体から「人間」としての尊厳を剥ぎ取り、高価な「生体パーツ」へと塗り替えるための漆黒のヴェールだった。

■ アーカイブ 002: 1cm のチタンによる「所有の刻印」

「さあ、まずはスーツの調整だ。君の体幹に合わせて、このワイヤーを締める」

富豪の合図で、屈強な男たちが彼女を特製の拘束台に押し付ける。漆黒の超鏡面ラテックスは、室内灯の光を鈍く、だが凶暴に反射していた。0.2 ミリの厚さしかないその生地は、肌に吸い付くどころか、化学的な親和性を持って皮膚の一部として融合しようとしている。

「待って、聞いていないわ。この……股間の……これは何？」

彼女の問いに答える者はいなかった。股間部には、0.5cm から 1cm へと、先端に向かって太さを増す形状記憶チタンワイヤーが装着された。

「っ、あぁっ……！ 重い……！ 骨が……骨が割れるっ！」

ワイヤーが油圧で締め付けられた瞬間、彼女がこれまでどんなハードなトレーニングでも経験したことのない衝撃が走った。柔軟な股関節は限界を超えて左右に引き裂かれ、0.5cm の鋭利な線が、カミソリのように粘膜を切り裂く。

そのまま、1cm の厚みを持つチタンが肉の奥深くに、まるで楔(くさび)のように沈み込んでいく。ラテックスの鏡面生地は、その食い込みに合わせて肉の表面を不気味な光沢で型取り、彼女の最も秘められた「裂け目」を暴力的に、そして艶めかしく広げ続けている。肉が金属に負け、左右に割れていくその感触が、彼女の脳を直接揺さぶった。

■ アーカイブ 003: 蹂躪の始まり —— 日常という名の終焉

「素晴らしい……。君は今から、この国で最も高価な『生体パーツ』だ」

富豪は、4K モニターを通じて彼女の食い込みの断面を満足げに眺める。彼女の脳内を、かつて表彰台で浴びた歓声がかすめる。しかし、その記憶は今、チタンワイヤーの冷たい感触と、肉を割る鈍い痛みによって強制的に上書きされていく。

彼女は、契約書にサインした瞬間、もはや「人間」ではなくなった。チタンワイヤーに締め付けられ、漆黒の超鏡面ラテックスの奴隷へとデグレード(格下げ)されたのだ。

「これから始まる砂漠の夜。君には 1cm の食い込みによる痛みを快楽に変えるナノマシンを注入する。動くオブジェとして、我々の視線を楽しませてくれ」

彼女の「日常」は、この黄金の部屋で完全に破壊された。残されたのは、漆黒の光沢と、肉の深部に沈み込んだ冷たい金属の絶対的な存在感だけだった。

■ アーカイブ 004: 地中海の牢獄 —— 狂宴のハイレグ

舞台はドバイの砂漠から、地中海に浮かぶメガヨットのデッキへと移る。突き抜けるような青い海と、真っ白なデッキ。そのあまりに美しいコントラストの中で、彼女の姿は異様なほどに浮き上がっていた。

彼女が纏っているのは、「漆黒の超鏡面ラテックス・モノキニ」。そのハイレグは、腰のラインから垂直に切り上がり、肋骨の下ギリギリまで食い込んでいる。ラテックスは太陽の光を極限まで反射し、彼女の肉体を「生きた人形」のように滑らかな光沢で包み込んでいた。